

あひひき
 楊の林を犬を伴れて通つて来たが、自分は一體此の白楊といふ樹は、餘り好かぬ。幹と云へば薄い連翹色で、葉と云へば鼠が、つて緑色の、鐵物細工を見るやうなので、頭を一杯に延して、空中で擴げて、團扇のやうな恰好をして震へてゐるので、自分は好かぬが、長い莖に無器用に附着けたやうな圓い小汚ない葉をうるさく振立てる所も好かぬ。此樹の觀て心地の好い時と云つては、低い灌木の中に一本高く聳えて、あか／＼とした入日の光を眞面に受けて、根方から木末まで同じ樺色に染りながら、燦然として風に騒ぐ夏の夕暮か——さもなれば、風の吹く晴れた日に、蒼空を影にして立ちながら、ざわ／＼と風に揉立てられる其勢に葉が抛れて、颯と吹飛されさうな時かである。兎に角此樹は好かぬので、其林には休まず、この樺の林まで来て、地上をわづか離れて下枝の生えた雨凌ぎになりさうな木を見立て、其下に巢を作つて、四方の景色を眺めながら、遊獵者でなければ其味を知らぬといふ、例の穩かな靜かな夢を結んだ。

あひひき
 何位眠つてゐたか判然しないが、兎に角久らくして眼を覺して見ると、林の中に一杯日が照つてゐて、何方を向いても、嬉しさうに騒ぐ木の葉を透して蒼空が華やかに火花でも散らしたやうになつて見える、雲は狂ひ廻る風に吹拂はれて隠れて了ひ、空はからりと晴れて、空氣は爽然とした一種の涼味を含んで人の精神を爽にする、尤も雨が霽つて靜かな夜になる時分には、大概いつも此様な前觸があるもので、そこで自分も獲れるか獲れぬか最う一度運を試めさうと思つて、起上らうとして、只見ると、彼方に悄然と坐つてゐる者がある。熱く視れば、それは百姓の娘らしい少女で、二十歩ばかり彼方に、物思はし氣に首を垂れて、兩手を膝に落して、片々の手を半分啓けて大きな草花の束を輕と持つてゐるが、花束は呼吸をする毎に段々滑つて縞の袴の上へ落ちかゝつてゐる。柔軟した清潔な短い白襯衣を着て、喉元と手首の所で釦を掛けて、大粒な黄ろい飾玉を二條にして領から胸へ垂らしてゐるが、なか／＼の器量好で、象牙のやうな色白の額際で幅の狭い緋の片巾を巻い

て、その下から美しい灰色の白つほい濃い髪の毛の叮嚀に梳したのを少し見せて、二ツの半圓を描かせて、左右に分けてゐる、顔の他の部分は日を受けて黄ろい點をほんのりと見せてゐるが、こんな色は薄皮の者でなければ見られぬもので。伏目になつて居たから、眼は見えなかつたが、その代り秀でた細い眉と長い睫毛は判然見えた、睫毛は濡んでゐて、片々の頬にも蒼ざめた唇へ掛けて涙の傳つた痕が夕日を受けてきら／＼と見える。總じて首付が可愛らしい、鼻が少し大きく圓すぎたが、それすら左ほど眼障にもならぬ、面色が殊に氣に入つたが、洵に柔和で微塵も厭味氣がなく、さも物憂さうで、何か悲しい事に出會つて邪氣なく途方に暮れた氣味が溢れるばかりである。誰かを待合せてゐるものと見えて、何か微かな物音がすると、急に面を擧げて、四方を顧視して、大きな涼しい牝鹿のやうな眼を薄暗い木影で光らした。で、大きくした眼を物音のした方へ向けたまゝで、暫らく聞澄してゐるが、聽て溜息をして、靜に此方へ向き直つて、前よりは一層低く屈むで、徐々花を擇り

出した。眶が赤らむで、唇はさも苦しうに痙攣つて、濃い睫毛の下から、またしても涙が淀み／＼流れ出て日光に煌めく。かうして久らく時を移してゐるが、少女はをり／＼手で面を撫廻すばかりで、身動をもせず聞耳を立てゝゐる、唯聞耳ばかり立てゝゐる……と、ふと又がさ／＼と音がする——少女は慄然とした。物音は罷まぬのみか、次第に高くなつて、近づいて、遂に思切つた急足の音となる。少女は起直つて、何となく氣怯がした様子で、傍眼も觸らなかつたが、眼差はきよときよとして、早く逢ひたいで炎えるやうになる。繁みを漏れて男の姿が隠現するのを視て、はつと顔を赧らめて、さも／＼嬉しうに嬌然して起上らうとしたが、ふと復た萎れて、蒼ざめて、狼狽して——男が傍へ来て立止つてから、漸く悸々した拜むやうな眼付で面を視上げた。

自分は尙ほ物蔭に潜むでゐながら、如何な奴かと思つて、其男を視ると、何だか厭な心地がした。是は何でも年のゆかぬ素封家に使はれてゐる生意氣な室僕か何か

で。衣服もおつう氣取つて、洒落くさい止度氣ない風をしてゐる。先づ外套は短い、青銅のやうな色の、主人の着故らしい奴で、端々を連翹色に染めた薔薇色の頸巻を咽喉一杯に巻いて、金モールの抹額を付けた黒天鷲絨の帽子を目深に戴ッてゐる。白い襯衣の角の圓い襟で用捨もなく耳を押付けて、頬を擦つて、糊で固めたカフで手首の赤い曲つた指まで隠してゐるが、指にはネザブツトカ名草の形のしたピリユ一ザの名入の指輪を幾個か穿めてゐた。氣を注げて観ると、人の面相には男には大慨氣に喰はぬ代り、忌々しい事だが、女には動もすると氣に入るのが有るが、此男のもその類で、桃色で、爽然とした、人を人臭いとも思はぬやうな面相である。粗末な面の癖に、故と何事も鼻で待遇つてゐるやうな、さも詰らないと云ひさうな面色を爲ようとしてゐる様子で、妄に薄鼠色の只さへ小さな眼をいと細くしたり、眉を皺めたり、口の端を引下げたり、無理に欠びをしたり、さも故とらしい氣の無ささうな放恣の風をして、或は勇ましく捲上つた赤ちやけた揉上を撫で、見たり、又

は厚い上唇の黄ばむだ髭を引張つて見たりして——いや、どうも見て居られぬ程に氣取る。待合せてゐた少女を見るから、最う氣取り出して、のそりく大股に歩いて傍へ来て、立止ると、一寸肩を揺つて、両手を外套の隠袋へ入れたが、氣の無さうにチロリと少女の面を視て、其處へ坐つた。

「待つたか？」と矢張何處か他處を眺めながら、足を動かして欠び雜に云ふ。

少女は急に返答を爲得なかつた。

「どんなに待つたでせう」と漸う聞えるか聞えぬ程の小聲で云ふ。

「ふむ」と、男は帽子を脱つて、殆ど眉間から生えだした濃い髪の毛の思切つて渦を卷かした奴を勿體らしく撫で、大様に四方を顧眄して、さて又密と帽子を冠つて、大切な頭を蔽して了つた。危なく忘れる所よ。それにこの雨だもの！」と復た欠び、用は多し、さうくは仕盡れるもんぢやねえ。その癖動ともすれば小言だ。

時にお立は明日だよ……」

「明日？」と吃驚して男の顔を視る。

「明日だ……おい／＼頼むぜ」と少女の慄然として、密と俯向いたのを見て、忌々しさうに、早口に云ふ。「頼むぜ、アクリーナ、泣かれちや可厭。おれはそいつが甚い嫌だ」と低い鼻に皺を寄せて、「泣くなら直ぐ歸へらう……何だべらほうな——泣く！」

「あら。泣きやしませんよ」と周章て云つて無理に涙を飲込む。暫らくして、「それぢや明日お立なさるの？ いつ復た會はれるだらうねえ？」

「逢はれるよ、心配せんでも。さうよ、來年でなけりや——さ來年か何時か。」少し鼻聲で、氣の無さうに、「且つく彼得堡で役にでも就きたい様子だ。ひよつとかすると、外國へ往くかも知れん。」

「別れたら私の事なんざ忘れてお了ひなさるだらうねえ」と悲しさうに云ふ。

「何故？ 大丈夫、忘れつこはねえ、だがお前も是からは些と氣を注げるが好いぜ、

悪躰きも好加減にして、些たあ親父の云ふ事も聽きねえ。おれは大丈夫だ、忘れつこはねえ——そりや……」と平氣で伸をしながら、復た欠をして、「ねえ。」

「ほんとに、ヴィクトル、アレクサンドルイチ、忘れちや厭よ」と拜むやうに云つて、「こんなにお前さんの事を思ふのも、慾徳づくぢやないんだから……親父さんの言ふ事を聽けつてお言ひなさるけれど、私にやそんな事あ出來ないわ……」

「何故？」と仰向けに臥倒ぶ拍子に、兩手を頭に敷つて、胸から押出したやうな調子で云ふ。

「何故つて、お前さん。——あの始末だもの……」

と口を噤むで了ふ。男は時計の鋼製の鎖を弄りだしたが、久らくしてから、

「おい、アクリーナ、お前だつて馬鹿ぢやあるめえ、なあ。そんな詰らん言をいふもんぢやねえ。おれはお前の爲めを思つて言ふのだ、可いか、解つたか？ そりやお前は馬鹿ぢやねえ、お前の母親も然うだが、お前も全然の百姓ぢやねえ。だが

あひいき

然うは云つても教育はねえの——そんなら人の言ふ事なら、唯といつて聴もんだ。」
「たつて怖いやうなもの。」

「ヘン、馬鹿を言つてらあ、何が怖い事があるもんか！ 何んだそりや」と少女の傍へ摺寄つて、「花か？」

「花ですよ」と心細さうに云つたが「このボレワーヤ、リヤピンカ 草のは今私が摘

んで来たの」と少し乗地になる、「これを牛の仔に喰べさせると薬になるつて。ほら、

チレダー 草の——飼面の薬。一寸御覽なさい、綺麗ぢや有りませんか、私やこん

な綺麗な花あ初めて見てよ。ほら、ネザブツトカ 草のほら董……あ、これはね、お前

さんに呈けようと思つて摘んで来たの」と云ひながら、黄ろいリヤピンカの下に青

青としたワシリヨーク 草のを細い草で結へた大きな花束のあつたのを取出して、「入

りませんか？」

男はしぶく手を出して、花束を取つて、氣の無さうに香を嗅いで、それを指

あひいき

頭で回轉しながら、空を視上げて、物思はし氣な勿體ぶつた面をしてゐる。少女は熟と其面を視てゐるが、その眼付を視れば、愁を持つてゐながら、惚々として、身をも心をも打任せて、男を吾佛と崇めて、言ふなりに爲つてゐる。趣が溢れるばかりである。男に氣を兼ねてゐるから、泣きたいのを耐へて、名残惜しさうに面ばかり見てゐる、それに男は大玉か何ぞのやうに偃臥て、格別の慈悲を以て、厭な所を我慢して、本尊となつて拜まれてゐる。その赤ら面を視てゐると、故と平氣な風をして鼻で遇らつてゐる傍から、得々と己惚れてゐる所もちよいく見えて、誠に面が憎かつた。少女は此時さも男が可愛くてく、胸の締も何も亡して了つて、魅が自然とあこがれ出て、男の膝に纏はるといひさうな風で、何とも言へず美しかつたのに、男は、何をするかと思へば、ワシリヨークを草の上へ落して了つて、外套の腰の隠袋から青銅の縁を附けた圓い眼鏡を取出して、片々の眼窩へ嵌めに懸つた、けれども幾ら眉を皺めたり、頬を擡けたりして、鼻まで手傳に出して支へようとし

あひいき

ても、どうも外れて掌へ落ちる。

「なにそれは？」と少女が遂に不思議さうに問くと、

「眼鏡」と傲然として答へた。

「それを掛けると如何かなるの？」

「よく見えるのよ。」

「一寸見せて頂戴な。」

男は面を皺めたが、それでも眼鏡を渡して、

「破しちや不可せ。」

「大丈夫ですよ」と恐るゝ眼鏡を眼に宛がつて、「おや、何も見えなくつてよ」と邪氣なく云ふ。

「そ、そんな……眼を細くしろい、眼を」と不機嫌な先生といふ聲で叱ると、少女は眼鏡を宛がつてゐた方の眼を細くした。「ちよッ、間抜けめ、そつちの眼ぢやない

こつちのだい」とまた大聲に叱つて、仕改へる間もあらせず、眼鏡を引奪つて了つた。

少女は顔を赧らめて、忍び音に笑つたが、他所を願いて、

「どうでも私達の持つもんぢやないと見える。」

「知れた事よ。」

可哀さうに少女は吻と溜息をして、口を喋むで了つた。久らくすると、突然に、

「あゝ厭だ！ お前さんに別れちや一日だつて辛抱が出来ない。」

男は衣服の裾で眼鏡を拭いて、再び隠袋へ納れて、

「そりや當座は些たあ辛からうさ」とお慈悲に肩を叩いてやると、少女は密と其手を外して、怖々接吻する。

「お前はなか／＼しほらしい所があるからなあ」と得意になつて微笑して、「だが仕方がねえぢやねえか？ まア積つても見ろ、吾徒にや此様な鄙な所にやゐられねえ

あひいき

あひゞき

ぢやねえか、最う直に冬がお出でなさるが、田舎の冬と来た日にや怖毛を振つ了ふからな。それから思ふと彼得堡は違つたもんだ！ そこいらが結構だらけだ、到底もお前なんぞは夢にだつて見た事のない物ばかりだ。家だつて建前が違はあ、それから立派な町もありや、會社も有る、何しても文明開化といふものだ——大したもんよ！……」

少女は子供のやうに少し口を開いて、一心になつて聴いてゐる。

「と話して聞しても」と寝返りを打つて、「無駄か。お前にや空々寂々だ。」

「何故え？ 解りますわ、よく解りますわ。」

「ほ、ほう、えらいな！」

少女は萎れた。

「何故此頃は然う邪慳だらう？」と伏目になつて云ふ。

「なんだと、此頃は？……ふむ、此頃か？ 此頃が好い！」と何となく不足らし

い。二人とも黙つて了つた。

「どれ、歸らうか」と男が脇を杖いて起直りさうにすると……

「あら、最う些とお出でなさいよ」と少女は拜むやうに云ふ。

「何故？……暇乞なら最う濟んだぢやねえか？」

「最う些とお出でなさいよ。」

男は再び横になつて、口笛を吹出したが、少女は其面を凝然と視た儘で傍眼も觸らぬ、見れば、段々胸が悸々し出した様子で、唇も痙攣れば、今まで蒼ざめてゐた頬も紅らむで来る……聴ておろく〜聲で、

「ヴィクトル、アレクサンドルイチ、お前さんは……あんまり……あんまりだ。」

「何が？」と眉を皺めて、少し首を擡げて、女の方へ振向ける。

「だつて無情だわ。今が別れたといふのに、何とも言はないで。何とか一言位言つて呉れたつて可さうなものだ、一言位……」

あひゞき

あひひき

「如何言へば可いといふんだ？」

「如何言へば可いか、知らないけれど……そんな事あ百も承知してる辯に……最う今が別れたといふのに一言も……あんまりだから可い！」

「可異な事をいふ奴だな！ 如何言へば可いんだといふに？」

「何とか一言……」

「えい、しちツくどい！」と忌々しさうに云つて、起上る。

「あら、勘忍……かにして頂戴よ」と狼狽て云ふ、涙を飲込みながら。

「腹も立たねえが、お前の没曉やにも困るぢやねえか。如何すれば可いといふんだ？ もとく女房にされねえな得心づくぢやねえか？ え、得心づくぢやねえか？ そんなら何が不足だ？ 何が不足だよ？」

と返答を催促するやうに、ぐつと少女の面を覗込むで、手を啓けて出すと、

「何も不足……不足は無いけれど」と吃りながら、恐々震へる手を出して「た、何

とか一言……」

涙がはらくと漏れる。

「へん、たうとうお株を始めた」と平氣なもので、帽子を目深にする。

「何も不足は無いけれど」と兩手を面に加て、歎歎て泣きながら「是から先は家に居るのが如何に辛いか知れやしない。私の身は如何なる事だと思ふと……屹度無理やりにお嫁に遣られて苦勞するに違ひないんだから、それを思ふと、私や……悲しくつて……悲しくつて……」

「並べろく、たんと並べろ」と地輪を踏みながら、口の中で言つてゐる。

「だから僅た一言、何とか一言……アクリーナ、おれも……お、おれも……」

ふいに嗚咽かへつて泣出したので言葉が斷絶る——草の上へ打伏に倒れて、さも苦しさに泣いてゐる。體はふるく震へて、頸窩で高浪を打つ……堪へに堪へた溜涙の關が一時に切れたのでそれを男は久らく起つて視てゐたが、聽て首を竦めて

あひひき

ぐるりと背を向けて、大股に去つて了つた。

久らく経つた。少女は漸く落着いて、面を挙げたが、ふと跳起きて、四方を顧みして、手を拍つて驚いた、跡を追つて駈出さうとしたが、足が利かない——ぱつたり膝を着く……自分は最う見るに見かねた。矢庭に木蔭を躍出ると、少女は自分の姿を見るや否や、急に力附いて、忍音に阿と云つて起上つて、木の間へ隠れて了つた。草花ばかり取残されて、四邊に散亂してゐる。

自分は茫然として立つてゐるが、聽てワシリヨークの花束を拾上げて、林を野へ出た。日は晴々とした蒼空に低く漂つて、薄く弱い景が輝きはせずに朦朧と射してゐる。日没には最う半時しか有るまい、天末には微に夕焼が見える。風が黄ろく乾びた刈科を渡つて烈しく吹付けるので、反かへつた細かい落葉が周章て起上つて、林に沿いた、往來を横ぎつて、自分の側を駈通る、壁のやうに野に向いた林の一面がざわ／＼として、光るのではないが、ちら／＼する、枯草や野草や藁には蜘蛛の

巢が一面に絡着いて、風に煽られて浪を打つ。自分は心細くなつて停歩つた……眼中の風物は流石に爽然とはしてゐるが、味氣なく寂れ果て、何處かに間近くなつた冬の凄まじい佛が見えるやうである。小心な鳥が重さうに羽敲をして、烈しく風を截つて、頭の上を高く飛んで行きながら、首を振向けて、自分の姿を視ると其儘、急に飛上つてちぎつたやうな聲で啼き／＼、林の向へ隠れて了ふと、鳩が幾羽ともなく群を成して、勢込むで穀倉の方から飛んで来て、ふと棒の振れたやうに舞昇つて、倉皇と野面に降りた——秋に違ひない！誰やら禿山の向を通ると見えて、空車の音が高く響渡る……

自分は其儘歸宅て了つたが、可哀さうと思つたアクリーナの佛はなか／＼忘れかねた、ワシリヨークの花束も乾びた儘で、尙ほ今だに藏てある……

四日間 (ガルシン)

(416)

忘れもせぬ、其時味方は森の中を走るのであつた。シュツ／＼といふ弾丸の中を落來る小枝をかなぐり／＼、山査子の株を縫ふやうに進むのであつたが、弾丸は段段烈しくなつて、森の前方に何やら赤いものが隠現見える。第一中隊のシードロフといふ未だ生若い兵が此方の戦線へ紛込でゐるから（如何してだらう？）と忙しい中で閃と其様な事を疑つて見たものだ。スルト其奴が矢庭にベタリ尻餅を搗いて、狼狽た眼を圓くして、ウツとおれの面を看た其口から血が滴々々……いや眼に見えぬやうだ。眼に見えるやうなは其而已でなく、其時ふツと氣が付くと、森の殆ど出端の蒼鬱と生茂つた山査子の中に、居るわい、敵が。大きな食肥た奴であつた。俺は瘦の虚弱ではあるけれど、やツと云つて躍蒐る、パチツといふ音がして、何か斯う大きなもの、トサ其時は思はれたがな、それがビュツと飛で來る、耳がグッン

と鳴る。打たなと氣が付た頃には、敵の奴めワツと云て山査子の叢立に寄懸つて了つた。匪れば匪られるものを、恐しさに度を失つて、刺々の枝の中へ片足踏込で蹶つて藻掻いてゐるところを、ヤツと一撃に銃を叩落して、やたら突に銃劍をグサと突刺すと、獸の吼るでもない唸るでもない變な聲を出すのを聞捨にして駈出す。味方はワツ／＼と関を作つて、倒れる、射つ、といふ眞最中。俺も森を畑へ駈出して、槌か二三發も撃たかと思ふ頃、忽ちワツといふ関の聲が一段高く聞えて、皆一齊に走出す、皆走出す中で、俺はソノ……舊の處に居る。ハテナと思つた。それよりも更と不思議なは、忽然として萬籟死して鯨波もしなければ、銃聲も聞えず、音といふ音は皆消失せて、唯何やら前面が蒼いと思つたのは、大方空であつたのだらう。頓て其蒼いのも朦朧となつて了つた……

(417)

どうも變さな、何でも伏臥になつて居るらしいのだがな、眼に遮ぎるものと云つて

(418)

は、唯掌大の地面ばかり。小草が數本に、その一本を傳はつて倒に這降りる蟻に、去年の枯草のこれが筐とも見える芥一摘みほど——これが其時の眼中の小天地さ。それをば片一方の眼で視てるので、片一方のは何か堅い、木の枝に違ひないがな、それに壓されて、そのまた枝に頭が上つてつるようと云ふものだから、ひどく工合がわるい。身動を仕たくも、不思議なるかな、些とも出来んわい。其儘で暫く經つ。竈馬の音、蜂の唸聲の外には何も聞えん。少焉あつて、一しきり蕩搔いて、體の下になつた右手をやつと脱して、兩の腕で體を支へながら起上らうとしてみたが、何がさて鑽で揉むやうな痛みか膝が胸、頭へと貫くやうに衝上げて来て、俺はまた倒れた。また眞の闇の跡先なしさ。

ふツと眼が覺めると、薄暗い空に星形が隠々と見える。はてな、これは天幕の内ではない、何で俺は此様な處へ出て來たのかと身動をしてみると、足の痛さは骨に應

へるほど！

何さまこれは負傷したのに相違ないが、それにしても重傷か擦創かと、傷所へ手を遣つてみれば、右も左もベツとりとした血。觸れば益々痛むのだが、その痛さが齧齒が痛むやうに間斷なくキリ／＼と腹を撈られるやうで、耳鳴がする、頭が重い。兩脚に負傷したことはこれで臆氣ながら分つたが、さて合點の行かぬは、何故此儘にして置いたらう？ 豈然とは思ふが、もしヒヨツと味方敗北といふのではあるまいか？ と、まづ、遡つて當時の事を憶出してみれば、初め臆のが末明亮となつて、いや如何しても敗北でないと收まる。何故と云へば、俺は、ソレ倒れたのだ。尤もこれは瞭とせぬ。何でも皆が斷出すのに、俺一人それが出來ず、何か前方が青く見えたのを憶えてゐるだけではあるが、兎も角も小山の上の此畑で倒れたのだ。これを指しては、背低の大隊長殿が占領々々と叫いた通り、此處を占領したのであつてみれば、これは敗北したのではない。それなら何故俺の始末をしなかつたら

(419)

(420)

う？ 此處は明放しの濁とした處、見えぬことはない筈、それに此處でかうして轉がつてゐるのは俺ればかりでもあるまい。敵の射撃は彼の通り猛烈だつたからな。好し一ツ頭を捻向けて四下の光景を視てやらう。それには丁度先刻しがた眼を覺して例の小草を倒に這降る蟻を視た時、起揚らうとして仰向に倒けて、伏臥にはならなかつたから、勝手が好い。それで此星も、成程な。

やつとこなと起かけてみたが、何分兩脚の痛手だから、なかく起られぬ。到底も無益だとグタリとなること二三度あつて、さて辛うじて半身起上つたが、や、その痛いこと、覺えず泪ぐむだくらる。

と視ると頭の上は薄暗い空の一角。大きな星一ツに小さいのが三ツ四ツきらくとして、周圍には何か黒いものが曇々と立つてゐる。これは即ち山査子の灌木。俺は灌木の中に居るのだ。さてこそ置去り……

と思ふと、慄然として、顔髪が彌整つたよ。しかし待てよ、畑で射られたのにし

ては、この灌木の中に居るのが怪しい。してみればこれは傷の痛さに夢中で此處へ這込だに違ひないが、それにしても其時は此處まで這込み得て、今は身動もならぬが不思議、或は射られた時は一ヶ所の負傷であつたが、此處へ這込でから復た一發喰つたのかな。

蒼味を帯びた薄明が幾個ともなし汚點のやうに地を這つて、大きな星は薄くなる、小さいのは全く消えて了ふ。ほ、月の出汐だ。これが家であつたら、さぞなア、好からうになアと……

妙な聲がする。宛も人の唸るやうな……いや唸るのだ。誰が同じく脚に傷を負つて、若くは腹に彈丸を有つて、置去の憂目を見てゐる奴が其處らに居るのではあるまいか。唸聲は顯然と近くにしているが近處に人が居さうにもない。はッ、これはしたり、何の事だ、おれ、この俺が唸るのだ。微かな情ない聲が出るわい。そんなに痛いのかしら。痛いには違ひあるまいが、頭がたゞもう茫と無感覺になつてゐる

(421)

(422)

から、それで分らぬのだらうまた横臥で夢になつて了へ。眠ることく……が、もし萬一此儘になつたら……えい、關ふもんかい!

臥ようとすると、蒼白い月光が隈なく羅を敷たやうに假の寢所を照して、五歩ばかり先に何やら黒い大きなものが見える。月の光を浴びて身邊處を燦たる照返を見するのは釦紐か武具の光るのであらう。はてな、此奴死骸かな。それとも負傷者かな?

何方でも關はん。おれは臥る……

いやく如何考へてみても其様な筈がない。味方は何處へ往つたのでもない。此處に居るに相違ない、敵を逐拂つて此處を守つてゐるに相違ない。それにしては話聲もせず箒の爆る音も聞えぬのは何故であらう? いや、矢張己が弱つてゐるから何も聞えぬので、其實味方は此方に居るに相違ない。

「助けてくれ〜!」

と破れた人間離のした唸聲が咽喉を衝いて迸出たが、應ずる者なし。大きな聲が夜の空を劈いて四方へ響渡つたのみで、四下はまた闇となつて了つた。たゞ相變らず蟋蟀が鳴しきつて眞圓な月が悲しげに人を照すのみ。

若し其處のが負傷者なら、この叫聲を聽いてよもや氣の付かぬ事はあるまい。してみれば、これは死骸だ。味方のかしら、敵のかしら。え、馬鹿くさい! そんな事は如何でも好いではないか? と、また睡眼を夢に閉ぢられて了つた。

先刻から覺めてはゐるけれど、尙ほ眼を瞑つたまゝで臥てゐるのは、閉ぢた睡越にも日光が見透されて、開けば必ず眼を射られるを厭ふからであるが、しかし考へてみれば、斯う寂然としてゐる方が勝であらう。昨日……たしか昨日と思ふが、傷を負つてから最う一晝夜、かうして二晝夜三晝夜と經つ内には死ぬ。何の業くれ。死は一ツだ。寧ろ寂然としてゐる方が好い。身動がならぬなら、せんでも好い。序に頭の機能も止めて欲しいが、こればかりは如何する事も出來ず、千々に思亂れ種

(423)

(424)

種に思侘て頭に些の隙も無いけれど、よしこれとても些との間の辛抱。頓て浮世の隙が明いて、筐に遺る新聞の數行に、我軍死傷少なく、負傷者何名、志願兵イワノフ戦死。いや、名前も出まいて。たゞ一名戦死とばかりか。兵一名！、嗟矣彼の犬のやうなものだな。

在りし昔が顯然と目前に浮ぶ。これはズツと昔の事、尤もな、昔の事と思はれるのは是ばかりでない、おれが一生の事、足を撃れて此處に倒れる迄の事は何も彼もズツと昔の事のやうに思はれるのだが……或日町を通ると、人だかりがある。思はずも足を駐めて視ると、何か哀れな悲鳴を揚げてゐる血塗の白い物を皆佇立てまじりぐく視てゐる光景。何かと思へば、それは可愛らしい小犬で、鐵道馬車に敷かれて、今の俺の身で死にかゝつてゐるのだ。すると何處からか番人が出て来て、見物を押分け、犬の衫上をむづと掴んで何處へか持つて去く、そこで見物もちりぐく。誰かおれを持つて去つて呉れる者があらうか？ いや、此儘で死ねといふ事であ

らうが、しかし考へてみれば、人生は面白いもの、あの犬の不幸に遭つた日は俺には即ち幸福な日で、歩くも何か酔心地、また然うあるべき理由があつた。え、憶へば辛い。憶ふまいぐ。むかしの幸福、今の苦痛……苦痛は兎角免れ得ぬにしろ、懐舊の念には責められたくない。昔を懐出せば自然と今の我身に引比べられて遺瀬無いのは創傷よりも餘程いかぬ！

さて大分熱くなつて來たぞ。日が照付けるぞ。と、眼を開けば、例の山査子に例の空、たゞ白晝といふだけの違ひ。お、隣の人。ほい、敵の死骸だ！ 何といふ大男！ 待てよ、見覺があるぞ。矢張彼の男だ……

現在俺の手に掛けた男が眼の前に踏反つてゐるのだ。何の恨が有つておれは此男を手に掛けたらう？

たゞもう血塗になつてシヤチコばつてゐるのであるが、此様な男を戰場へ引張り出すとは、運命の神も聞えぬ。一體何者だらう？ 俺のやうに年寄つた母親が有う

(425)

(426)

も知ぬが、さぞ夕暮ごといふせき植生の小舎の戸口にイミ、遙の空を眺ては、命の綱の擲人は戻らぬか、愛し我子の姿は見えぬかと、永くく待わたる事であらう。さておれの身は如何なる事ぞ？おれも亦まッこの通り……あ、此男が羨ましい！幸福者だよ、何も聞ずに、傷の痛みも感ぜずに昔を偲ぶでもなければ、命惜しとも思ふまい、銃剣が心臓の眞中心を貫いたのだからな。それく軍服のこの大きな孔、孔の周圍のこの血。これは誰の業？皆かういふおれの仕業だ。

あ、此様な筈ではなかつたものを。戦争に出たは別段悪意があつたではないのを。出れば或程人殺もしようけれど、如何してかそれは忘れてゐた。たゞ飛來る弾丸に向ひ工合、そののみを氣にして、さて乗出して彌々弾丸の的となつたのだ。

それから此始末。え、く馬鹿め！己は馬鹿だつたが、此不幸なる埃及の百姓（埃及軍の服を着けてをつたが）、この百姓になると、これはまた一段と罪が無からう。船でも潰けたやうに船に詰込れて君士但丁堡へ送付られるまでは、露西亞

の事もバルガリヤの事も唯噂にも聞いたことなく、唯行けと云はれたから來たのだ。若しも厭の何のと云はうものなら、筈の憂目を見るは愚かなこと、いづれかのバシヤのピストルの弾を喰はうも知れぬとことだ。スタンブルから此ルシチウクまで長い辛い行軍をして來て、我軍の攻撃に遭つて防戦したのであらうが、味方は名に負ふ猪武者、英吉利仕込のバテント付のビーボデーにもマルチニーにも怯ともせず、前へくと進むから、始て怖氣付いて遁けようとするところを、誰家のか小男、平生なら持合せの黒い拳固一撃でツイ埒が明きさうな小男が飛で來て、銃剣翳して胸板へグザと。

何の罪も咎も無いではないか？

おれも亦同じ事殺しはしたけれども、何の罪がある？何の報いで咽喉の焦付きさうなこの渴き？渴く、渴く！とは如何なものか、御存じですか？ルーマニヤを通る時は、百何十度といふ恐ろしい熱天に毎日十里宛行軍したツけが、其時でさ

(427)

(428)

へ斯うはなかつた。あゝ誰ぞ来て呉れ、ば好いがな。

しめた！ この男のこの大きな吸筒、これには屹度水がある！ けれど、取りに行かなきやならぬ。さぞ痛む事だらうな。えい、如何するもんかい、やツつける！ と、這出す。脚を引摺りながら力の脱けた手で動かぬ體を動かして行く。死骸はわづか一間と隔てぬ所に在るのだけれど、その一間が時に取つては十里よりも……遠いのではないが、難儀だ。けれども、如何仕様も無い、這つて行く外はない。咽喉は熱して焦げるやう。寧ろ水を飲まぬ方が手短かに片付くとは思ひながら、それでも若しやに羈されて……

這つて行く。脚が地に泥んで、一ツ動する毎に痛さは耐きれないほど。うんぐといふ唸聲、それが鬨で泣聲になるけれど、それにも屈すに這つて行く。やツと這付く。そら吸筒——果して水が有る——而も澤山！ 吸筒半分も有つたらうよ。やれ嬉しや、是でまづ當分は水に困らぬ——死ぬ迄は困らぬのだ。やれぐ！

兎も角かもお蔭さまで助かりますと、片肘に身を持たせて吸筒の紐を解にかゝつたが、ふツと中心を失つて今は恩人の死骸の胸へ伏倒りかゝつた。如何にも死人臭い匂がもう芬と鼻に来る。

飲んだわぐ！ 水は生温かつたけれど、腐敗しては居なかつたし、それに澤山に有る。まだ二三日は命が繋がれやうといふもの、それぐ生理心得草に、水さへあらば食物なくとも人は能く一週間以上活くべしとあつた。又餓死をした人の話が出てゐるが、その人は水を飲でゐるばかりに永く死切れなかつたといふ。

それが如何した？ 此上五六日生延びてそれが何になる？ 味方は居ず、敵は遁けた、近くに往來はなしとすれば、これは如何でも死ぬに極つてゐる。三日で濟む苦しみを一週間に引延すだけの事なら、寧ろ早く片付けた方が勝ではあるまいか？ 隣の、側に銃もある、而も英吉利製の尤物と見える。一寸手を延すだけの世話で、直ぐ埒が明く。皆打切らなかつたと見えて、彈丸も其處に澤山轉がつてゐる。

(429)

(430)

さア、死ぬか——待つてみるか？ 何を？ 助かるのを？ 死ぬのを？ 敵が来て傷を負つたおれの足の皮剥に懸るを待つてみるのか？ それよりも寧ろ我手を一思に……

でないことさ、さう氣を落したものでないことさ。活られるだけ活てみようぢやないか。何のこれが見付かりさへすれば助かるのだ。事に寄ると、骨は避けてゐるかも知れんから、さうすれば必ず治る。國へ歸つて母にも逢へる、マ、マ、マリヤにも逢へる……

あゝ國へはかうと知らせたくないな。一思に死だと思はせて置きたいな。さうでもない偶然おれが三日も四日も藻掻てゐたと知れたら……

眼が眩ふ。隣歩きで全然力が脱けた。それにこの恐ろしい臭氣は！ 随分と土氣色になつたなア！……これで明日明後日となつたら——えゝ思遣られる。今だつて些ともかうしてゐたくはないけれど、かう草臥ては退くにも退かれぬ。少し休息し

たらまた、舊處へ戻らう。幸ひと風を後にしてゐるから、臭氣は前方へ持つて行かうといふもの。

全然力が脱けて了つた。太陽は手や顔へ照付ける。何か被りたくも被る物はなし。責て早く夜になとなれ。かうだによつてと、これで二晩目かな。

などゝ思ふ事が次第に糾れて、それなりけりに夢さ、

大分永く眠つてゐたと見えて、眼を覺してみればもう夜。さて何も變つた事なし、傷は痛む。隣のは例の大柄の五體を横たへて相變らず寂としたもの。

どうも此男の事が氣になる。遮莫おれにしたところで、憐しいもの可愛ものを残らず振棄て、山越え川越えて三百里を此様なバルガリヤ三界へ来て、餓ゑて、凍えて、暑さに苦しんで——これが何と夢ではあるまいか？ この薄福者の命を斷つたそればかりで、かうも苦しむことか？ この人殺の外に、何ぞおれは戦争の利益

(431)

になつた事があるか？

人殺し、人殺の大罪人……それは何奴？ あゝ情ない、此おれだ！

さうく、おれが従軍しようと思立つた時、母もマリヤも止めはしなかつたが、泣いたツケ。何がさて空想で眩んでゐた此方の眼にその泪が這入るものか、おれの心一ツで親女房に憂目を見するといふ事に其時はツイ氣が付かなんだが、今となつて漸うく眼が覺めた。

え、今更お復習しても始まらぬか。昔を今に成す由もないからな。

しかし、彼時親類共の態度が餘程妙だつた。何だ、馬鹿奴！ お先眞暗で夢中に騒ぐ！と、かうだ、何處を押せば其様な音が出る？ ヤレ愛國だの、ソレ國難に殉ずるといふ口の下から、如何して彼様な毒口が云へた？ あいらの眼で觀ても、おれは即ち愛國家ではないか、國難に殉ずるのではないか？ ではあるけれど、それはさうなれど、おれはソノ馬鹿だといふ。

で、まづ、キシニョーフへ出て来て背囊やら何やらを背負されて、數千の戦友と俱に出征したが、その中でおれのやうに志願で行くものは四五人とあるかなし、大抵は皆成らう事なら家に寝てゐたい連中であるけれど、それでも善くしたもので、所謂決死連の己達と同じやうに従軍して、山を越え川を踰え、いざ戦闘となつても負けずに能く戦ふ——いや更と手際が好いかも知れぬてな。尤も許しさへしたら、何も角も抛て置いて匆匆と歸るかも知れぬが、兎も角も職分だけは能く盡す。

颯と朝風が吹通ると、山査子がざわ立つて、寢惚た鳥が一羽飛出した。もう星も見えぬ。今迄薄暗かつた空はほのくくと白みかゝつて、軟い羽毛を散らしたやうな雲が一杯に棚引き、灰色の暗霧は空へくと晴て行く。これでおれのソノ……何と云つたものかしら、生にもあらず、死にもあらず、謂はゞ死苦の三日目か。

三日目……まだ幾日苦しむ事であらう？ もう永くはあるまい。大層弱つたからな。此鹽梅では死骸の側を離れたくも、もう離れられんも知れぬ。やがておれも是

になつて、肩を比べて臥てるようが、お互に胸悪くも思はなくなるのであらう。
兎に角水は十分に飲むべし。一日に三度飲まう、朝と晝と晩とにな。

(434)

日の出だ！ 大きく盆のやうなのが、黒々と見ゆる山査子の枝に縦横に断截られて血潮のやうに紅に、今日も大方熱い事であらう。それにつけても、隣の一貴様はまア何となる事ぞ？ 今でさへ見るも淺ましいその姿。

ほんに淺ましい姿、髪は段々と脱落ち、地體が黒い膚の色は蒼褪めて黄味さへ帯び、顔の腫脹に皮が釣れて耳の後で皸裂れ、そこに蛆が蠢き、脚は水腫に脹上り、脚絆の合目からぶよぶよの肉が大きく食出し、全身むくみ上つて宛然小牛のやう。今日一日太陽に晒されたら、これがまア如何なる事ぞ？ かう寄添つてゐては耐らぬ。骨が舍利に成らうが、これは何でも離れねばならぬ——が、出来るかしら？ 成程手も擧げられる、吸筒も開けられる、水も飲めることは飲めもするが、この重

い動かぬ體を動かすことは？ いや出来やうが出来まいが、何でも角でも動かねば

ならぬ、假令少しづつでも、一時間によし半歩づつでも。

で、彌移居を始めてこれに一朝全潰れ。傷も痛だが、何のそれしきの事に屈るものか。もう健康な時の心持は忘たやうで、全く憶出せず、何となく痛に慣んだ形だ。一間ばかりの所を一朝かゝつて居去つて、舊の處へ辛うじて迎着きは着いたが、さて新鮮の空氣を呼吸し得たは束の間、尤も形の徐々壞出した死骸を六歩と離れぬ所で新鮮の空氣の沙汰も可笑しいかも知れぬが——束の間で、風が變つて今度は正面に此方へ吹付ける、その臭さに胸がむかつく。空の胃袋は痙攣を起したやうに引締つて、臍腑が顛倒るやうな苦しみ。臭い腐敗した空氣が意地悪くむんむつと煽付ける。

(435)

精も根も盡果て、おれは到頭泣出した。

全く敗亡て、ホウとなつて、殆ど人心地なく臥て居た。ふツと……いや心の迷の

(436)

空耳かしら？ どうもおれには……お、矢張人聲だ。蹄の音に話聲。危なく聲を立てようとして、待てしばし、萬一敵だつたら、其の時は如何する？ この苦しみに輪を掛けた新聞で讀んでさへ頭の髪の毛の彌堅さうな目に遣はうも知ぬ。随分生皮も剥れやう。傷を負うた脚を火炙にもされやう……それしきは未な事、かういふ事にかけては頗る思付の好い渠奴等の事、如何な事をするか知たものでない。渠奴等の手に掛つて弄殺しにされやうより、此處でかうして死だ方が寧ろ勝か。とはいふもの、もしひよつとは是が味方であつたら？ えい山査子奴がいけ邪魔な！ 何だと云つてかう隙間なく垣のやうに生えくさつた？ 是に遮られて何も見えぬ。でも嬉やたつた一ヶ所窓のやうに枝が透いて遠く低地を見下される所がある。あの低地には樋か小川があつて戦争前に其水を飲だ筈。さう云へばソレ彼處に橋代に架した大きな砂岩石の板石も見える。多分是を渡るであらう。もう話聲も聞えぬ。何國の語で話してゐたか、薩張聽分られなかつたが、耳さへ今は遠くなつたか。己れやれ是が味方で

あつたら……此處から喚けば、彼處からでもよもや聽付けぬ事はあるまい。怒ひに早まつて虎狼のやうな日備兵の手に掛らうより、其方が好い。もう好加減に通ひさうなもの、何を愚頭々々してゐるのかと、一刻千秋の思ひ。死骸の臭氣は些も薄らいたではないけれど、それすら忘れてゐた位。

不意に橋の上に味方の騎共が顯れた。藍色の軍服や、赤い筋や、槍の穂先が煌々と、一隊擧つて五十騎ばかり。隙前には黒髻を怒らした一士官が逸物に跨つて進み行く。残らず橋を渡るや否や、士官は馬上ながら急に後を捻向いて、大聲に

「断足イ！」

「お、い、待つて呉れえ〜！ お願ひだ。助けて呉れえ！」

競立つた馬の蹄の音、サーベルの響き、がやく〜といふ話聲に嘔聲は消壓されて〜、やれ〜聞えぬと見える。

え、情ないと、氣も張も一時に脱けて、バツタリ地上へひれ伏しておい〜泣出

(437)

した。吸筒が倒れる、中から水——といへば其時の命、命の綱、いやさ死期を緩べ
て呉れてるようといふソノ靈藥が滾々と流出る。それに心附いた時はもうコップ半
分も残つてはるぬ時で、大抵はから〜に乾燥いて咽喉を鳴らしてゐた地面に吸込
まれて了つてゐた。

この情ない目を見てからのおれの失望落膽といつたらお話にならぬ。眼を半眼に
閉ぢて死んだやうになつてをつた。風は始終向が變つて、或は清新な空気を吹付
ることもあれば、亦或は例の臭氣に嗔咽させることもある。此日隣のは彌々淺まし
い姿になつて其慘狀は筆にも紙にも盡されぬ。一度光景を窺はうとして、ヒヨツと
眼を開いて視て、慄然とした。もう顔の痕迹もない。骨を離れて流れて了つたのだ。
無氣味にゲタと笑ひかけて其儘固まつて了つたらしい頬桁の、その厭らしさ淺まし
さ。随分鬮體を扱つて人頭の標本を製した覺もあるおれではあるが、ついぞ此様な
のに出逢つたことがない、この骸骨が軍服を着けて、紐釦ばかりを光らせてゐる

所を見たら、覺えず胸震が出て心中で嘆息を漏した、「嗚呼戦争とはこれだ、これが
即ち其姿だ」と。

相變らずの油照、手も顔も既うひり〜する。残少な水も一滴残さず飲干して了
つた。渴いて〜耐へられぬので、一滴嘗める積で、おもはずガブリと皆飲んだの
だ。嗚呼彼の騎兵がツイ側を通る時、何故おれは聲を立て、呼ばなかつたらう？
よし彼が敵であつたにしろ、まだ其方が勝であつたものを、なんの高が一二時間責
さいなまれるまでの事だ、それをかうして居れば未だ幾日ごろ〜して苦しむこと
か知れぬ。それにつけても憶出すは母の事。かうと知つたら、定めし白髪を引撈つ
て、頭を壁へ打付けて、おれを産んだ日を悪日と呪つて、人の子を苦しめに、戦争
なんぞを發明した此世界をさぞ罵る事だらうなア！

だが、母もマリヤもおれがかう腕死に死ぬことを風の便にも知らうやうがない。あ
あ、母上にも既う逢へぬ、いひなづけのマリヤにも既う逢へぬ。おれの戀も〜是限

か。え、情けない！と思ふと胸が一杯になつて……

えい、また白犬めが。番人も酷いぞ、頭を壁へ叩付けて置いて、掃溜へボンと抛込んだ。まだ息氣が通つてゐたから、それから一日苦しんでゐたけれど、彼犬に視ればおれの方が餘程慘憺だ。おれは全三日苦しみ通したものを。明日は四日目それから五日目六日目……死神は何處に居る？ 来てくれ！ 早く引取つてくれ！ けれど死神は来てくれず、引取つてもくれぬ。此凄まじい日に照付られて、一滴水も飲まなければ、咽喉の炎えるを欺す手段なく剩さへ死人の臭が腐付いて此方の體も壊出しさう。その臭の主も全くもう溶けて了つて、ボタリ／＼と落来る無數の蛆は其處らあたりによ／＼とぞろ／＼。是に食盡されて其主が全く骨と服ばかりに成れば、其次は此方の番。おれも同じく此姿になるのだ。

その日は暮れる、夜が明けける、何も變つた事がなくて、朝になつても同じ事。また一日を空に過す……

山査子の枝が揺れてざわ／＼と葉摺の音、それが宛然ひそめきたつて物を云つてゐるやう。「そら死ぬ／＼／＼」と耳の端で囁けば、片々の耳元でも懐しい面「もう見えぬ／＼／＼」

「見えん筈ぢや、此様な處に居るぢやもの、」
と聲高に云ふ聲が何處か其處らで……

ぶる／＼としてハツと氣が付くと、隊の伍長のヤーコウレフが黒眼勝の柔しい眼で山査子の間から熟と此方を覗いてゐる光景。

「鋤を持ち来い！ まだ他に二人をる。こやつも敵ぞ！」といふ。

「鋤は要らん、埋ちやいかん、活て居るよ！」

と云はうとしたが、たゞ便ない呻聲が乾付いた唇を漏れたばかり。

「やッ！ こりや活きとるンか？ イワーノフぢや！ 来い／＼、早う来い、イワーノフが活きとる。軍醫殿を／＼！」

瞬く間に水、焼酎、まだ何やらが口中へ注入られたやうであつたが、それぎりでまた空。

擔架は調子好く揺れて行く。それがまた寢せ付けられるやうで快い。今眼が覺めたかと思ふと、また生體を失ふ。繃帯をしてから傷の痛も止んで、何とも云へぬ愉快に節々も緩むやう。

「止まれ、卸せ！ 看護手交代！ 用意！ 擔へ！」

號令を掛けたのは我衛生隊附のピョートル、イワーヌイチといふ看護長。頗る背高で、大の男四人の肩に擔がれて行くのであるが、其方へ眼を向けてみると、まづ肩が見えて、次に長い疎髻、それから漸く頭が見えるのだ。

「看護長殿！」

と小聲に云ふと、

「何か？」

と少し屈懸るやうにする。

「軍醫殿は何と云はれました？ 到底助かりますまい？」

「何を云ふ？ そけな事アツて好もんか！ 骨に故障が有るちふぢやなし、請合アツて助かる。貴様は仕合ぞ、命を拾うたちふもんぢやぞ！ 骨にも動脈にも觸れちよらん。如何して此三晝夜ばツか活ちよつたか？ 何を食ふちよつたか？」

「何も食ひません。」

「水は飲まんぢやつたか？」

「敵の吸筒を……看護長殿、今は談話が出来ません。もう少し後で……」

「さうぢやらうく寝ろく。」

また夢に入つて生體なし。

眼が覺めてみると、此處は師團の假病舎。枕頭には軍醫や看護婦が居て、其外彼

得譽えりよくで有名いうめいな某國手はなこくしゆがおれの傷やを負おつた足あしの上に屈懸こゝろまがつてゐるソノ染馴なじみの顔かほも見え
 る。國手こくしゆは手てを血塗ちまじにして脚あしの處ところで暫しばらく何かやツてゐるが、頓やがて此方こちらを向むいて、
 「君きみは命いのち拾ちひろひをしたぞ！　もう大丈夫だいぢやうぶ。脚あしを一本ほんお貰もらひ申まをしたがね、何なんの、君きみ、此
 様やうな脚あしの一本位ほんぐらゐ、何なんでもないさねえ。君きみもう口くちが利きけるかい？」
 もう利きける。そこで一伍いっぶ二什にじふの話はなしをした。

(明治三十七年六月譯)

露助の妻

翻譯にもあらず、翻譯にもあらず、さりとして創作にもあらず、
 一種の和合物わがくもの、こつてりと嚴しげさを強つよて讀者の嗜しよに上あさん
 とするを厚顔あつちかしとして爪弾つまはじする人あり、されど此誹せりはわれ一
 人にて受うくべきにあらず、相棒あひだに七五郎しちごろうとていつも前座まえざを
 勤こめて人の腋下あしもとを擦こぐる男あり、彼もたしかに關係かへりあれば、
 ソレ半分はんぶん負擔しやうたんてけと荒氣あらいなく衝遣しやうせんる、是れしかしながら達
 人とやらは爲なぬ事ことなるべし。(二葉亭)

(446)

テレビン氏はふと目を覺したが、誠に好い心持だ。天氣は好し、レウマチーズムに悩んで居る左の膝小節も痛まず、昨夜福引で金の茶釜でも引當たやうな氣がして、何となく心が浮立つ。今日中に書いて了はねばならぬクリスマスの際物小説、その筆を執るには丁度持つて来いといふ氣分だ。剩さへ年百年中我他彼此する臺所方面も今朝は寂然として音なく、此處の家では珍しい此泰平の氣象から、いや好い事を思ひ着いたわえ、外でも無い約束の小説の冒頭には（四海浪穩かに吹く風枝も鳴らさず）とやらう、それが好いと思ふと、欣々として自然に笑顔になるやつ。まづヤツコラサと起きて、顔を洗ひの、それから仕事に掛るべえかね。

と口で言つて了へば造作も無いが、さて然う早くは手が廻らぬ。まづ衣服を着換へて、足の先で上靴を探しても片足だけで片足の分らぬも其筈、誰が蹴飛ばしたも

のやら、ずんと向うの隅に裏返しになつてゐる。據どころ無いから、ちんがもがもがで其處まで行つて、片足に有付いて、さて左向き右をして傍の洗面臺に對ひ、水管の龍頭を捻れば、冷水が馬の小便の如く迸る。其下へ頭を持つて行き、先づ濕して置いて、片手で石鹼盒の中を撈ると、グリセリンの髓甲石鹼と思ひきや、鄭寧に四つに疊んが三留紙幣を擱んだ！

「怪しからん事だ！」と思はず口走つて、「おい、アン子さん！ アン子さんてばッ！」

いくら呼んでも返事が無いので、何を爲てゐるのかと、ノツソリ妻君の部屋へ行つてみると、妻君のアン子さん、部屋の真中に脊を丸くして蹲跪で、鏡臺の抽斗を顛覆して、何か懸命に搜物をしてゐる。

「如何したんだい、これは？」と例の三留を慳貪に鼻頭へ突付けて、「石鹼盒の中に這入つてたぢやないか。」

(447)

(448)

……ト一目見るより妻君は莞爾々々となつて、

「まあ、好かつた！　いくら捜しても知れないから、ぢれツたくツて……石鹼

盒に這入つてやうとは思はなかつたワ。」
按ずるに右の三留はクリスマススの小遣に取つて置き、妻君の臍縁で、ボン／＼の
函に忍ばせて確かに鏡臺の上に乗せて置いた筈なのが、お祭前のどさくさ紛れに、
何時の間にかグリセリンの石鹼と居處を取易へてゐたもので。

「本當にクリスマススぢや目の眩るほど忙がしいンですもの、随分トンチンカンも爲
るワ。」

と少し妻君忸怩氣味で、切々と雑品を舊の抽斗へ漉へ込む。

ボン／＼の函を開ると、果して中から石鹼が轉け出た。抑も此ボン／＼の函たる、
矢張婚禮の時の禮物の一ツで、曾ては見事な鐵色であつたのが、今は見る影もない
老褪た珈琲色に化つてゐて、中には此外に結婚前にテレビン氏から其頃はまだ處女

のアン子さんに贈つた壯な文も這入つて居る。

この文の文句に對しても今更此様な顔をしられた義理では無いが、しかしテレビ
ン氏はひどい佛頂面をして、黙つて石鹼を受取つて、黙つて部屋へ戻つて来て、罪
もない自分の顔を自暴にゴシ／＼と洗ひ出した。洗ひ了つて石鹼を、今度こそは間
違ひなく、納れべき所へ納れて置いて、何心なく手を伸してヒヨイと手拭を取らう
とすると、いつも其が掛つて居る釘の先に、今朝は薄汚れた妻君の前垂が垂下つて
ゐる。

重ね／＼の不首尾にテレビン氏は見る／＼澁面になつて、

「アン子さん！　手拭！　手拭は何處だツ？」

「ヒヨツクラや！　旦那に手拭を取つてお上げ！　もう大方乾いたらう。」

尻端折した赤脚衛門、下女のヒヨツクラが名は體を表はしてヒヨツコリ出て来た
のを見ると、クリスマスス前は誰家のも然うだが、これも矢張眠が足りない。腫ほつ

(449)

(450)

たさうな睡をして、眼ばかり怪しく光らせて、どうやら少しは氣も狂つてゐさうな面相。それが小股に抱へて來た洗濯板のやうなものを笑然鼻頭へ衝出したから、驚いてテレビン氏は身を引いたが、能く視ると、それが手拭で。こいつもお祭前の忙がし仕事に暖爐に翳して乾すべきものを、窓外へ釣したから堪ない。乾きは乾いたが、寒風に吹曝されて、板のやうに突張つて了つて、よしや姐の御用に立たうとも以て紳士の面を拭ふべきでない。

テレビン氏は泣聲になつて、

「ア、情ない！ これで面を拭けといふのか？ こりや、一體、何だ？ 手拭ぢや無からう。棒だらう。アン子さん！ 棒で面は拭けないよッ！」

「何ですって、手拭が棒に化つたッて？ 人間が笹棒だから、手拭も棒になる筈さ」と妻君の稍尖り聲が寢室に聞える。聽て何か猫でも踏み潰したやうなキウといふ切なさうな音がする。これは大方肝癢紛れに無理に筆筒の抽斗を明けた音であらう

が、それが止むと、忽ち寢室の戸がサツと開いて、飛んで出たる女の姿、何やら白い物が翻然と空に翻つたかと思ふと、もうテレビン氏は頭から新しい手拭をスポーツと被せられて居た。

十分も経つ内には、顔も洗ひ仕舞へば、頭も撫付け了つて、全然お粧の出來たテレビン氏、彼得堡の事であるから、天井の低い、薄暗い、たつた一ツある窓から誰家のか崩れかゝつた烟突が見える食堂で、テーブルに對ひ、湯沸の影にチャクと構へてゐた。紅茶はもうコップに注いであつたが、砂糖がない。テレビン氏は匙でコップの端を叩きながら、

「アン子さん！ 砂糖は何處に在るい？ 砂糖が無いよ！」

「無い筈は無いワ。ちやんと四ツ出しといたんだもの。」
と寢室の中に聲がする。

「私が無いと言ふからにや、無いんだと思ひなさいッ！」

(451)

(453)

「へえ〜。チヨツ、口喧ましいねえ！」

これは小聲であつたが、聴て咽喉も裂けよと大聲を張上げて、

「ヒヨツクラや！ 昨日の棒砂糖を出してね、旦那にドツサリ山程切つてお上げ!!」
ドシンといふ地響が臺所方面に聞えた。

地震かと思つてハツとすると、また三ツ四ツ續けざまにドシン〜として、最後に思ひ切つて大きく一ツドシンとして、窓ガラスがガタ〜と躍つて、それなり聞となる。とばかりして地震の親のヒヨツクラが食堂へ現はれたのを見ると、大いさ可なりの石塊ほどもある砂糖の塊を五ツ六ツ皿に納れて持つて來たのであるが、生憎今出來のコツブは小さくて之を容れることが出來ん。仍でテレビン氏も今はハヤ是迄と觀念して、眼を瞑つて砂糖なしの紅茶を喫んで、這々の體で書齋へ戻つて來た。

朝から立てつけて散々な目に遭はされて、腹の底では肝癪の蟲がむづ〜するが、

しかし書齋へ戻つて、手馴れたテーブルに對つて、綺麗な紙を拵べて、これに字は少と拙いが、(四海浪穩かに吹く風枝も鳴らさず)と例の宿構の文句を書いてみると、ズツと好い心持になる。兎も角も面白い冒頭だ。さて次の文句……次の文句は何とせう、と考へ〜ペンを取擧げて一二句を續けると、

ギーツと書齋の戸が開いて、敷居の上には現はれたは妻君、見れば臺所用の石板を抱へてゐる。テレビン氏は忽ち佛頂面になつた。

「一寸ですよ……One minuteで好いの……アノ晩のお菜は鶏肉でも好くツて？」

「シヤモでは不好ツて？」

「何でも好いよツ！」

と舌打をする。折角の興が看る〜醒めて行くのが忌々しくてならん。

「ヘン、大層お愛想の好いこと！」と妻君も黙つてはゐない。人を！ 成るだけ口

(453)

(454)

に適たものを拵らへて上げようと思つて、人が親切に聞けば、舌打なんぞして……ほんとは如何すれば此様な厭な偏窟な人が出来ちまつたんだらう！」

と出て行きさうにして、ふと佇立つて、

「あら、どうしよう？……忘れて了つてよ。チヨイと葱といふ字は艸冠？ 竹冠？」

テレビン氏は振向もせずに、

「竹冠！」

「下に心が一ツ？ それとも二ツ？」

「三ツ！」

「あら、然う？ 三ツ？」

と妻君は如何にも世話女房らしい老成らしい面相をして、石板へ竹冠に勿の字に下に心が三ツと、彼得堡の八百屋には何を書いて通じるから好いやうなもの、篆文にも無さうな妙な字を書留めて、出て行く。

跡でテレビン氏は、一二行書きかけたやつに自暴に棒を引いて、尤も例の胃頭の一句だけは大事に取つて置いて、而して裏を返して更に書出したが、もう如何にも氣が乗らぬ様子で、難かしい顔をしてゐる。

十分と経たぬ中に、またアン子さんの姿が入口に現はれて、

「また彼様な面して……後生だから其様な面しないで頂戴よ。一寸だから」と何か得意らしく莞爾々々しながら、何やら抹殺だらけの書いた物をテレビン氏の鼻頭へ衝出して、

「何だと思つて？ これ手紙よ。ヒヨククラが市場へ往つて来る内に、お祝ひの手紙を書いてクセニヤさんの許へ遣らうと思つて……一寸見て頂戴な。」

テレビン氏が額越に讀んでみると、手紙の文句はかうである。

「こひしき〜我クセニヤの君よ！ 彼得堡ならよかんめれど、さるノウオチエルカスクのやうな天ざがる鄙におはしまして、如何にこの祝ひ日を送り給（ふかと

(455)

(456)

したのを消して)ひてんやと想像しつゝあり侍る……」
 テレビン氏は冷笑を禁じ得ぬさまで、

「第一、ノウオチエルカスクはそんな天離る鄙ぢやないよ。それに私の聞いたところでは、クセニヤさんはノウオチエルカスクへ往つたんぢやなくて、浦潮斯徳へ往つたんだ。ノウオチエルカスクと浦潮斯徳とは些とばかり方角が違ふやうだ。」
 妻君は怩無として、

「私はまた夫といふ者は妻の誤謬を正す義務が有ると思つたら、へえ、其様な諷刺を言ふのが作法ですかねえ。」

「だつて私はお前のゴビウを正してゐる暇が無いんだ。忙がしんだよッ！」
 と憤然となつて、卒然その手紙を引奪つて揉みくちやにして了ふ。

「あら〜……あんまりだから好い……よくツて！ もう頼まないワ！ 郎君は始終忙がしいんだ、自分の事なら暇が有つても、人の相談相手になる暇は無いんだ。」

ほんとに手前勝手な堪らない人だよ！」

と怒罵ちらして、ボタンと思ふさま暴く戸を閉附けて出て行つて了ふ。

この戸のボタンがいつも夫婦喧嘩の幕切で、これがあつた時は次の幕の出るには一寸間のあるのが例であるから、テレビン氏も吻と一息して、差措いたペンをまた取擧げた。こひしき〜クセニヤの君へやる手紙の成行などは些とも心配せぬ。どうせ物になるかならぬか知れぬ手紙だ。書さして止になつた例は是迄にいくらもある。或時何か捜すとして妻君の机の抽斗を明けて見ると、手紙の書掛が山程出たが、どれを見ても皆「平生はイタク御無沙汰いたし侍る」とばかりで後が續けて来ない。妻君の氣力は之より以上に續かぬものと見える。

で、テレビン氏は邪魔も入らず首尾よく書續けて、今は四枚目となつた。所謂興が乗つて来たところで、ヒヨイと面を擧げて見ると、いつの間にかまた妻君が目の前に衝立つてゐる。衝立つてゐるは好いが、此時の妻君の様子といつたら、いつに

(457)

(458)

無い真面目で、學校の卒業式に記念の爲同窓と撮つた寫眞で見た外、こんな澄した面を見た事がない。

テレビン氏もつい釣込れて、我にもなく、

「如何したの？」

……と様子ありけに妻君は、

「如何しても好いから、まア、黙つて來てみて御覽なさい。」

仰せに従つて黙つて眼に隨いて妻君の寢室へ往つてみると、妻君は顔で窓の方を指して、

「一寸之を御覽なさい。綺麗でせう？」

然るに窓から見えるものは隣家の煤けた煉化の壁ばかりで、何さら綺麗なものも見えぬから、テレビン氏は戸惑をしたが、能く聞いて見るとナニ綺麗なのは窓ガラス其自身なので、外は寒いには暖かいから、ガラスが汗をかいて種々の紋様が浮

出してゐる。

「ほら、ね、此方の左の方が女の羊飼、前に男の羊飼が膝を衝いて、足の所に犬のやうなものが……ね？」

さてはお祭前の忙しさに少し逆上せたのではあるまいかと、駭然して其面を覗き込んでみると、目附はいつもの通りで格別異つた所もない。

妻君は尙ほも言葉を續けて、

「これを郎君に見せたら、何かの参考になるかも知れないと思つて、それで態々呼んで上げたの。繪にしたら面白い畫になるワ。」

と繪心も無い癖に。

けれども返事が無いのは、テレビン氏全く窓を覗てゐなかつたので、窓の羊飼もさる事ながら、此方にもツと面白いものがある。それは寢臺の側に在る妻君の靴で、其上にガラクタが山と積である。まづボンネット入のボール函へ刻烟草を入れたの

(459)

に、ジャミの入った罎に、昨夜捕つた鼠のまだ入つてゐる捕鼠器に、占易の本に、底に油蟲が踏潰されてへばり付いた上靴に、クリームを附けたサンドウ井ツチの喰掛に、珈琲磨と宛然古道具屋の店を顛覆したやうな體裁。

何を言つても黙つてゐるので、妻君は少憤の氣味で。

「郎君には人の言つてゐる事が解らなくツて？ 先刻から綺麗でせうくツて言つてゐるのに、返事もしないで……」

テレビン氏は御催促に痛み入つて、更に向直つて窓ガラスに凍付いた羊飼夫婦を視れば、見やうに由つては、下女が車夫と密會してゐるのとも見えれば、沙漠で駝が蹣跚でゐるのとも見えて、要するに愚にも附かないが、しやうことなしに、

「さう綺麗のやうだ……」

と後は苦笑。
妻君は此様子を見て愈々憤れて、

「郎君は何を然う怒つてゐるの？」

賣言葉に買言葉で、

「怒つてゐるんぢやないが、人が熱心に書いてるところを、何だの彼だのと言つちや始終邪魔をする。餘り機嫌よくもして居られんぢやないか。」

「い、え今日ばかりぢやないワ。郎君は始終怒つてゐるワ。結婚してから而來、一日だつて御機嫌の好かつたことは無いワ。」

大分雲行が穩やかでないから敵手になるも面倒臭いと、テレビン氏は黙つて出て行きさうにすると、

「ぢや、返事をしないで行つて了ふの？ ぢや彌々私とかうして居るのが御迷惑なの？ それなら然うと、判然言つて頂きませう。」

テレビン氏は振返つて、黙と穴の開くほど妻君の面を眺めて、
「ぢや如何すれば氣が済むのさ？」

(462)

「如何すればッて…如何もかうも無いワ。只私とかうして家庭を成して居るのが御迷惑なら、御迷惑だと、チャンと判然然う言つて下さりやそれで好いのだワ。若か然うなら私あ薬師屋に（と泪聲になつて）懇意もあるから、モ…モルヒネを買ひにやるから好い…。」

このモルヒネは一寸した喧嘩にも直ぐ出るやつで、餘り珍らしくもないが、之を聞くとテレピン氏はいつも嚇となる。

物をも言はず卒然妻君の手首をムツと攪んで、成らう事なら横面を一ツピシヤリと参りたさうな権幕で、

「お黙り！ お前は直きソレを言ふ…もう二度と再び私の前でモルヒネの事を言ふと承知せんよ！」

妻君は握られた手を振解いて、今迄ベソをかきさうなのが、急に畏ろしい権幕になつて、

「失敬だワ郎君は！ レデーの前で大きな聲なんぞ出して、それでも郎君は紳士？ 一昨年の暮阿母さんが亡なつてから誰も私の加勢の仕手が無いと思つて、そんなに人を輕蔑すると、私何をするか知れなくツてよ。夜會へ出て、男を拵へて、散々郎君に恥をかゝせて世間へ面出のならないやうにするが、それでも好くツて！」

テレピン氏は何も言はず、カツと唾を吐いてプイと出て了つた。

跡で妻君は嘆息して、

「如何して私は結婚なんぞ仕たらう？ 彼様な人と一生暮すのかと思ふと、うんざりしツ了ふワ！」

「如何して私に結婚なんぞ仕たらう？」

テレピン氏も書齋へ歸つて喟然として、

「如何して己は結婚なんぞ仕たらう？ 彼様な女と一生暮すのかと思ふと、うんざりしツ了ふ！」

うんざりしながら筆を執つてみたが、もう書けぬ。想が散漫して、支離滅裂にな

(463)

つて八方に狂ひ廻つて、耳鳴もすれば、門口の呼鈴も鳴る。はてな、誰が来たらうと、耳を欬てると、忽ち妻君がやつて来て、

「郎君、マリ子さんが来たんだから、後生でから挨拶に出て下さいな。女子大を卒業した立派な人だし、それに華族さん方とも交際が有るんだから、来てお愛想の一ツも言つて……」

「華族と交際が有らうが、無からうが、其様な事は如何だつて好い。それに女子大を卒業したといふけれど、女子大を卒業するほど教育のある立派な人なら、クリスマス前の忙しさを承知で、人の家へ邪魔に来る奴も無いぢやないか。」

「シツ！ 静かに……聞えるといけない……と客間の方を覗いてみて……そんな事言はないで、一寸でさアね。一寸来てお愛想の一ツも言つて、近頃は繪で夢中になつてなさる所なんだから、ミケランジェロが如何だとか斯うだとか言つて、お辭儀して引込みや、それで好いんでさアね。造作も無い事だワ。」

「それが私にはなかくの大役だ。出来もしない繪の而も間違だらけの講釋を永々と聞かれて、終はいつも手前味噌だ。彼人と話をする後で頭痛がする。まア眞平御免を蒙らう。」

「だから郎君は偏窟だつていふんだよ。人のお友達が来ても、挨拶にも出て呉れないんだもの。好いワ、頼まないワ！」

とブイと書齋を出た時の顔は三文の價値もなかつたが、でも客間へ這入つて来た時には、もうズツと取澄して……

テレピン氏も其間隙にコツソリ書齋を脱けて、臺所から往來へ出た。何處といふ宛も無いが、足の向く方へ匆々と行く。マリ子さんといふのは人の非ばかり拾つてあるく。他人の秘密話を始めると日の暮るのを忘れるといふ有名な女學士で、そのいやに氣取つた騒々しい笑聲を聞くと、テレピン氏はピンと頭に應へて、慾にも徳にも居た、まらなくなるのである。

で、二時間ばかり其處らを彷徨いて、空腹を抱へて、水漬を垂して、小説氣などは何處か其處らへ取落して來たやうな詰らぬ顔をして歸つて見ると、たつた今マリ子さんが歸つたといふところで、やうく後馳に夕飯の支度といふと、大層穩かに聞えるが、實は得利寺、いや大石橋、いや遼陽の大激戦といつたやうな騒ぎ。ガタン、ピシヤン、ガラ／＼、ガチヤンといふ物騒な音のする中に妻君が下女を吐り飛ばす聲が榴散彈の破裂するやうに聞える。此間テレビン氏は詰らぬ面をして黒麵包を咬つてゐる。

「何を、何をするんだよ！ それはクリームぢやないか！ クリームをお皿に入れる奴があるもんか！ ソース入に入れるんだよ、ソース入にさ。ほんとに仕様がなねえ、此の人は。黙つて居りや、何を爲るか知れやアしない。もう澤山／＼。そんなにに入れて如何するんさ。あら、いけないといへば！ ほんとに、もう、私打つ

てよ!!」

と怒罵るのが一しきりして、それが止むと、此度は、

「へえ、これが細肉？ 貴女の國では之を細肉といふの？ 馬鹿にお仕でない！ こんな細肉が有つて堪るもんか。細肉ぢや無くツてよ、これは。いゝえ細肉ぢや有りません。憚りながら私だつて學校で料理法を習つてよ。細肉と尋常の肉の區別が出来ないで如何するもんか。おや此人は、まだ強情張つてるね。彌々細肉に違ひないといふんだね。そんなら一所にお出で、鳥屋へ行つて確めて來よう、これが細肉か細肉でないか。さア、お出で、さア……ナニ私の間違ですと？ 知れた事さ、お前の間違さ。細肉か細肉でないか、一目見りや直ぐ分る。お前なんぞに欺騙されて堪るもんか。私は是でも學校で料理法を習つてよ。よ。」

物の一時間も経つて、辛と遼陽が抜ける、飯の支度が出来る。けれどもテレビン

氏、先刻にからの騒ぎにけんなりして、食慾も何も何處へか行つて了つて、折角の細肉のカツレツも旨くは喰へん所から、つい不味さうにニチャクとやる。ト見て妻君の面も曇る。あゝ不味さうに喰てる所を見ると、これは何處かで御飯を濟して来たのかも知れない。それも一人で喰たか、二人で喰たか、何だか知れたもんぢやないと思ふと、もう満身の妬氣が腦を衝いて、厭味となつて口へも出る。そこでテレビン氏も憤懣に堪へぬことになる。

「怪からん事をいふ！ 私を其様な不品行な者と思てるのか！ 結婚以來只の一度だつて、餘所の女を横目で視たこともない私だ……」

「といはれて信じる私だと思つて？ そんなデタラメは餘所の人に仰しやい。」とツンとする。

テレビン氏は残念で堪らぬ貌で、

「あゝ然うかい、そんなら好いさ。然う私の言ふ事を信じないなら好いさ。お前が

さう思つてる所で、私一人一生懸命に節操を守るには當らない。今だから言ふが、實は從來私のやうなものでも、些とや少と何とか言つてくれる女が無いではなかつた、しかし私は男子の節操といふことを思つて、斷じて不義めいた事はしなかつたが、馬鹿氣てゐた、あゝ馬鹿氣てゐた……」

「すると、不義めいた事をしようと思へば出来る場合も有つたんですね？ 大方そんな……」と息氣が塞つて、「事たらうと思つた……さア、序に残らず言つてお仕舞ひなさい。さア、何度さういふ不義を、不道德を働きました？」

嚇と逆止してテレビン氏は手近に在つた舟形の芥子壺を取つて、あはやテーブルの上へ叩き付けようとしたが、うんと耐へて、

「あゝ、もう、實に……實に耐らん……毎日々々一ツ事ばかり。私は、もう、どうも、かう狂氣になりさうだ。もう好加減にして貰ひたい。私は忙しい身體だ。少しは人の身にもなつて見るが好い。」

(470)

「さうさ、郎君の身になつて見りや、そりやア、どうせ、私のやうな醜婦ぢや不満
足でせうさ。」

「いや、そんな事を不満足と言ふンぢやない……」

「どうせ然うでせうさ。これが更と別品で、持參金をドツサリ持つて来て……」

「誰がそんな持參金なんぞの事を……」

「持參金でも」と一段聲を張揚けで、「ドツサリ持つて来て、それで臥てゐて御飯が
喰られるやうだつたら……」

「そ、ゝ、そんな……」

「郎君もさぞ御満足でせうけれども、私に財産が無いから、郎君も臥てゐて御飯が
喰られなくツて……」

「好加減になさいツ！」

「せうことなしに、朝から晩までクツクと拵いでも、端錢ほか取れないで、始終

乞食みたいな生活をして……」

「お黙りツ！ お黙りといへばツ！ 人が黙つてれば好いかと思つて怪からん事を
いふ。あまりといへば、ぶ、ゝ、無禮極まる。あゝ解つたお前がそんな愛想づかし
をいふのは、何だね、離縁がして貰ひたいだね？」

「さうねえ、離縁して貰ひたく無くもないのねえ。早く離婚を許す法律が出れば好
いと思つてるワ。」

「ふゝむ、法律が出たら、何を理由に離婚の申請をする積だい？」

「理由はいくらだつて有るワ。」

「心得の爲一ツ伺がつて置きたいもんだね。」

「聞かなくツたツて大抵解りさうなもんだ。郎君のソノ根性のヒン曲がつた所が第
一の理由になります、へえ、憚りさまながら。」

と是れにはよも返す言葉もあるまいといひたけに、大勝利得意満面で、ズツと起

(471)

つて食堂を出て行く。

呆氣に取られてテレビン氏は暫らく其後影を目送つてゐたが、これも臆て邪慳に起上る拍子に、足で椅子を蹴飛ばして、食堂を出た。で、書齋へ来るや否や、ソファの上へ身を投掛けて、太い溜息を吐くのであつた。

あゝ、どうも、堪らない。これでは夫婦生活といふものは宛然監獄の生活だ。監獄の一日は娑婆の一年に掛向うといふが、してみると、アン子に連添つて既う五年になるから、一年が三百六十五日だに困つて、五年で五五二五の、五六三二と、それから三五の十五に三足して十八か。すると千八百二十五年になる。アン子に連添つて千八百二十五年になるのである！ 千八百二十五年の間毎日日々こんな厭な思をして來たのである。

人生五十といふのが相場なら、乃公は今三十三だから、跡まだ十七年ある。一年が三百六十五年に向うのだから、十七年で何年になる？ えゝと、三六五に一七を

乗けるのだ。些と面倒だな。えゝと、六七四十の二……いや、間違つた、五七だ。五七三十七……ぢやない、えゝと、五七……あゝ、いかん！ と起直つて、鉛筆執つて、原稿紙の端で、熱心に計算して見て、夢中になつて大きな聲で、

「六千二百零五年！」

妙なもので！ この六千二百零五年には前の千八百二十五年ほどには驚かなかつた。餘り複雑つた計算に熱中したので、中頃から計算する趣意が其方除になつて、苦心の結果六千二百零五年といふ積數を得た時には、何が六千二百零五年だか、一寸解らなかつた位で、うんざりする代りに先生茫然したのである。

茫然して天井裏を眺めてゐる中に、昂ぶつた神経も大に落着いて今は平調に復し、初て吻と太息つくころ、忽ち又臺所方面に當つてガチャ／＼ガタンといふ音。續いてアン子の尖り聲で、

(474)

「そらく！ それだから言はない事ぢやない。何故お前は然う不注意なんだらう？ ほんとに無教育の者は仕方がないねえ。壊れなかつたから、好いやうなもの、壊れなくツたツて騒々しいぢやないか！ 旦那のお仕事の邪魔になるぢやないか！ 以来は屹度氣をお付けッ!!!」

と末の一句に千鈞の力があつて、アン子こが威丈高たけだかにギクツとなつた姿が目の前に見えるやうであるが、テレビン氏しには此末の一句よりも最少せうすうと氣に入つた句が別に有つて、思はずニヤリとした。しかし是は極内の話はなしで。

剥啄はくたくと寢室の戸とに音づれる者あり。誰だかは直ぐ分つたが、故意と、

「誰だい？」

「私！ 這入つても好くツて？」

と其辭許そのくせゆるしも待たずに匆々と這入つて来て、

「私！ わかつたワ。何故郎君なぞは今日は其様に機嫌きげんが悪いんだか。當て、みませう

か？ 屹度何だワ、今日は小説せうせつが書けないんだワ、氣きが乗らなくツて。ね、然うでせう？」

書けないのぢやない、書かせないのだと思つたけれど、黙だまつてゐると妻君さいくんはもう一人でそれにして了つて、

「然うだワ、それに違ひないワ。私わたしがかうと鑑定かんていした事に、間違つた例たがひが無いワ。だから皆が私の事を觀察くわんさつが鋭敏えいびんだつて言つて、よ。」

ほいと掛聲かけこゑが出さうになつたのをテレビン氏しは押耐おつこたへた。

「こんな時に何程勉強いくらんきんきうしたつて駄目だめだから、もう舍諸おやしなさいな。而しかしてもう今夜こんやはお茶ちやにして早く臥ねて了しまひませう、明日あしたは私わたし一日買物いちにちかひものに歩あ行るかなきやならないから、明日あしたになさいな。明日あしたなら屹度書けてよ。」

と一寸黙ちよいとだまつて返答へんたふを待つてみたが、テレビン氏しは一向黙かうだまつてゐるので、

「まア、決斷けつだんに乏としいのねえ。こんな決斷けつだんの悪い人ひとと評議ひやうぎしてゐたら夜よが明けあけち了ま

(475)

ふ。

と一人で合點して、トバクサと部屋を出るより早く大聲に、

「ヒヨツクラや！ お茶にするから、湯沸をお出し。早くよ！」

といふものでテレビン氏は、否應なしにいつもよりは早めに食堂へ来て晩のお茶を待つ身となつた。で、熟ら考ふるに、妻君の言ふ所大に道理が有る。今夜は早く寢て明日の朝夙く起きよう、然うすれば朝の中に書いて了ふ、幸ひ冒頭にはチャンと取つて置きの名句もある、それが好いと決斷に乏しい人の癖として後馳に漸く決斷が付きは付いたが、さてテーブルの上を觀れば、例の砂糖の大塊が突兀として高まつてゐるから、手の出しやうがない。據どころなく妻君の出て來るのをまぢりと待つてゐるところが、幾時経つても以上出て來ない、のみならず、妻君の部屋では時ならぬボシヤ〜ゴシ〜といふ音が聞える。どうやら身仕舞でも始めたらしい。「常談ぢやないぜ。人を待たせて置いてお化粧だ……おい〜、アン子さん何時迄

洗つてるンだ！ もう好加減にしないか！ 人が待つてゐるンぢやないか！」

すると食堂の入口に、丈にも餘る赤髪を蓬と振亂して石鹼の泡だらけの面をした女鬼が忽ち姿を現はして、ハツタとばかりテレビン氏を睨付けて大音聲に呼はつたり。

「何ですツて？ 早く洗つて了へ？ 餘計なお世話で。早くしよう、遅くしよう

と私の自由です！ 郎君の指圖を受ける理由は有りません！ 人を何だと思つてゐる

ンだらう？ 下女や婢ぢやあるまいし、一家の主婦たる者が、身仕舞をする時間に

まで干渉されて堪るもんか！ 早くしろと仰しやつても、私には早く出來ません。

明日の朝まで掛るかも知れないから、然う思つてお居でなさい？」

と女鬼の姿は搔消す如く失せて、妻君の寢室に又も聞ゆる故意とらしい熱心なゴシ〜ボシヤ〜といふ音。

是非に及ばぬと觀念して、テレビン氏も砂糖なしの紅茶を喫んで、急いで部屋へ

戻つて来て、ガツカリして寢臺の上へ倒れた。今月一日に山道の十四五里も歩いたやうな心持がする。

で寂然してゐると、懸て熱心なゴシ／＼も止んで、臺所方面で今一しきりガミガミといふ聲がして、妻君は部屋へ戻つた様子。ピタ／＼と上靴の音がして、簞子の抽斗を開たり閉たりする様子であつたが、それが止むと、本でも讀むのか、紙を撥る音がして、むしやく／＼と物を言ふ氣配……と寂然となる。妻君の起きてゐる中に寂然となる。ことは滅多に無い事で、不思議に思つたから、テレビン氏は、舍ば好いの上に靴を突掛けて窃と往つて覗いて觀た。

覗いて觀ると寢臺の側の化粧臺に、青ボヤの豆洋燈が載せてあつて、其薄明がホノリ室中に射して一寸味に見える中で、アン子さん樂々と夜着に包まつて、片手には林檎の喰掛け、片手には繪入雜誌を持つて、それを讀んでゐる。見ると、寢臺の側の小卓の上には、林檎が山程皿に盛つてあつて、其お隣には刻煙草入にパイプ、

それから香水の罎に來年の剝曆が竝んでゐて、お刺にもう直きクリスマスといふ此頃の寒さに、部屋の小窓は開放しになつてゐる。

「アン子さん、お前は氣でも違つたのかい？ この寒さに開放しにして置いて！」
けれども妻君思はせ振に何とは言はぬ。而して喰刺しの林檎の心を皿の上に置いて、又一ツ好さうなのを取る。

「こんな事をして置いて、又風邪を引がうと思つて……さうしちや咳嗽が出ると大騒やる癖に。」

妻君は夫の顔を尻眼に掛けて、冷笑して、

「好いワ、風邪を引かうが、咳嗽をしようが、私が死だつて、郎君に關係が有りやしましい。人が死ねば好い／＼と思つてる癖に……」

ボタンと手暴く窓の戸を閉めて置いて、テレビン氏が、

「誰もお前が死ねば好いと思つてる者はない。けれどもお前も私の妻なら、も少し

(480)

人間らしくしてゐて貰ひたいと思ふのだ。」

「ぢやア私人間ぢやなくツて？」

「人間でないとは言はん。しかし、此の寒さに窓を開放しにして置くなんぞは普通の人間の餘りせぬ事だ。それに此林檎は如何したんだ？ 胃が弱い癖にお前の喰心房にも呆れる。」

妻君は愈々冷笑して、

「郎君の物を識らないのにも呆れる。これを御覽なさい。」

と繪入雑誌を出すから、受取つて妻君の指で示す所を見ると、それはハキヨセと

してある謂は、掃溜欄で、妻君此掃溜欄が大の最負なのである。

豆洋燈の側へ持つて行つて、讀んでみると、最初のは、

身體を健かにせんと欲する人は夜寝る時林檎を食ふべし、獨逸の大醫シテツエ
ル氏の説に、就眼前に林檎を食へば大に健康に利あり、かくすれば膏身體の滋養

となるのみならず、以て百病を醫すべし云々。

次のは、長生を願ふ人は窓を明けて寝るべしとて、一見して虚偽の見え透く種々の實例が擧げてある。其次のは更に驚くべき發見で、音楽を以て髪のを生す法！
愈々出で、愈々奇なるは、唱歌療病法！！

テレビン氏はアツとも言へず、只もう溜息をして雑誌を返すと、妻君は得意満面
で、

「そら御覽なさい。此様に種々新發明があるのに、郎君と言つたら、文學の本と首
引ばかりしてゐて、世間の事はお芋の煮えたも御存じない。餘程迂濶に出來ツ了つて
るのねえ。」

はや、もう、トント挨拶のしやうもない始末であるが、兎も角も何事も無いを幸
にして、テレビン氏は部屋へ歸ると、果せるかな、物の十分と經たぬ内に、もう妻
君がゴホン／＼と苦しげに咳入る聲が聞える。

(481)

露助の妻

間隔の壁を叩いてテレビン氏が、

「そらく、それだから言はない事ぢやない。」

同じ様に壁を叩き返して妻君も、

「うるさいッ！ 喧ましくツて眠られやしない。」

しかし是は冤罪。眠られないのは咳嗽の所爲で、こいつが何時まで経つてもなかなか止まぬ。其中に妻君は起きて臺所へ往つた様子。しばらく我他彼此して、聽てそれが鎮まると、ふとテレビン氏の部屋の入口に、空嚙を手に持つて眞蒼な面をした妻君が、中有に迷ひましたといひさうな風で現れて、

「郎君の望が叶つてよ……私……もう駄目だは……」
と聲も皺枯れてゐる。

「何が？」

「私……今……毒を飲んだワ……」

「毒を？」とテレビン氏も流石に起上らずには居られなかつた。

「ど、如何して？」

「餘り咳嗽が出て切ないから……先刻マリ子さんが……咳嗽……咳嗽の藥を持つて来て呉れたから、それを飲まうと思つて……食……食堂へ行つて何だか變な物を飲んぢやツた……」

「ど、如何な心持がする？」

「此處るところが……」と兩手で胸を壓へて、「かう煮えくり返るやうで……あゝ、死さうだ……」

「暗黒を手探なんぞで捜すからだ。仕様が無いなア！ 如何な味がした、飲んだ物は？ まさか石油を飲んだんぢやあるまい？」

「石油ぢやないけれど……何だか、かう變なもの……」

「何を飲んだんだらうなア、仕様がないなア！……醫者を呼んで來やうか？」

露助の妻

「ソーダが飲みたい……」

「ソーダ？ ソーダは何處に在る？」

「玄關の次の間の棚に……」

心得たりとテレビン氏は、早速手燭に火を點じて、ソーダを捜しに玄關の次の間へ来て見れば、成程ソーダは棚の上の罎に在つたから、手捷こく之を取卸して、さア此度は水だ。水だくと我から急いで周章いて、敷居に蹶躓いて、消飛んで、柱で、頭をアイタシコ、目から火がおりや泪も出て、泣くにも泣かれぬ此の場の仕誼に、我ながら厭になつちやつたけれど、これではならぬと氣を取直してトツバクサと、臺所へ行くとして下女部屋の前を通れば、かねて宵惑のヒヨツクラが、奥のお引を待ち兼ね、前垂外す暇のあらばこそ、臺所箒を持つたなりに、其儘其處に俯臥の他愛ない姿を見ると、大きな口を明けばなしの蟻のない腹まで見えるやうで、夢は天國に通ふかと思はれ、妻君の介抱に夜深さふけに此騒ぎする身に比較べて、

ア、つくづく羨ましいと、忙がしいテレビン氏も暫らくは天井を仰いで嘆息せざるを得なかつた。

兎角してコップに水を盛つて、氣が急げば手も顫へて、道々溢し々々、意氣地のない風をして辛と妻君の部屋へ持つて来て、急拵のソーダ水の沸々と泡の立つところを、妻君の唇へ宛がふと、妻君は色氣の無い口付して、ガブんとそれを一息にしてやつて、

「ア、おいしかつた！」

とケロリとなる。

「何だ、もう癒つたのか？」

「いゝえ、まだ癒つたんぢやないけど、でも大變落着いたの。何でも酸かつたから、醋を飲んだに違ひないワ。」

「そんなら然うと早く言やア好いのに、吃驚したらうぢやないか。」

露助の妻

「でも變な心持がしたんですもの。今でもまた變な心持よ。それに神経も狂つてよ。アノ醫師がさう言つたツケ、私の神経は大變纖弱だつて、學者の神経は皆斯うだつて。だから一寸した事にも直き狂つて了つて、もう今夜だつて容易に眠付かれやしない。心臓の鼓動するやうな、探偵小説でも讀まなくつくちや。」

「心臓の鼓動するやうな探偵小説ツて、そんなものは私の所に有りやしない。」

「郎君の處に無くツても、其處に有つてよ、そのテーブルの抽斗に。憚りさま、取つて頂戴な。」灰色娘」ツていふの。有つて？ 多謝」

と小説本を受取つて、

「もう好いから彼方へ行つてお眠みなさい。もう直き十二時になつてよ。」

テレビン氏は温順しく言ふ事を聽いて、部屋へ戻つて、立木を切倒したやうにドサンと寢臺の上へ打倒れた。この最後の妻君自害の一幕で、ホツと氣も勢も盡き果て、全然まるツて了つて、もう天地が顛覆らうが、關はぬ氣になつて、早く眠て

何も角も忘れて了ひたいと、目を瞑つて寂然となる。

妻君寂然として探偵小説を讀んでゐる。

「……洵然とばかり飛込んだり。爾時橋の袂の柳蔭よりヌツと出でたる怪しの人影、水面を透し見て、何やら獨り頷きつゝ、懐を搔探り取出したる呼子の笛、ピューと一聲吹鳴らせば、彼方の森にも笛の音して、忍び出でたる曲者一人、彼此顔を見合せて莞爾とばかり打笑む折柄、片割月は雲間に隠れて黑白も分かぬ闇となりしが、月の再び漏出しころには、はや曲者はいづち行にけん、影も形も見えざりけり……」

と讀みさして、眠さうな欠び一ツ。

「郎君！ もう眠て？」

一向答應が無い。けれども妻君委細構はず、

「考へて見ると、郎君は幸福よ。据膳で御飯を喰べて、寐ると言つても人に床を敷

露助の妻

らせて、何一ツ不自由の無いのは、皆私が附いてるからだワ。餘所の奥さん達を御覽なさい。私のやうに破靴に破足袋で我慢して居る人は一人だつて有りやしない。やあ、何が無い彼が無いと強請して、買つて呉れなきや、それこそ大變だワ。太眠もすれば、場合に依つては随分面と向つて人身攻撃もするワ。それなのに、私は何も買つて貰へなくつたつて、不平一ツ言はずに温順しくして居るワ。だから私は佛性だと思つて。ね、私は佛性ぢやなくつて？」

う、ふむとテレビン氏の部屋で奇聲が聞えたばかりで、何の音沙汰も無い。妻君はドシンと一ツ壁を叩いて、

「私の言ふ事が聞えなくつて？ 私は佛性ぢやなくつて？ なくつて?? なくつて??」

(明治三十七年十二月作)

大正五年十二月廿三日印刷
大正五年十二月廿六日發行

(片戀外六編)
實價九十錢



著 作 者 長谷川 二葉亭
 版權所有者 東京市日本橋區通四丁目五番地 和田 利彦
 發 行 者 東京市小石川區久堅町百八番地 金 網
 印 刷 者 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所
 印 刷 所

發 行 所

東京市日本橋區
通四丁目五番地

春 陽 堂

電話本局五十一番
振替一六一七

○ 著氏郎太林森外鷗 ○

齋藤松洲氏裝 永原止水氏書

■ 美奈和集

▽ 縮刷

□□□ 新型特製美本
送價一圓五十錢
送料八錢

文學に多少の趣味を有する人で水沫集の名を知らない人はあるまい。我が文壇の人に於て水沫集より異常の興味と幾多の啓蒙とを受けたい人はあるまい。我が文壇に本集は文壇唯一の寶典にして而も其價值は日々新たなるものがある。實處「舞姫」「うたかたの記」「埋木」「折薔薇」等二十篇九百餘頁、鷗外博士の傑作及び諸外國の代表的作家の傑作のみ。何れも優雅なる國文と雄渾なる漢文と精巧なる歐文脈とを融合調和して新文運を開拓せる名作。今や縮刷美装して刊行さる、藝術の精髓、異國の精華收めて茲にある。

永原止水氏裝幀

■ 即興詩人

▽ 縮刷

□□□ 新型極美本
送價金一圓
送料八錢

原書は丁抹人アンデルセンが筆に係り、譯者其完成に大約九星霜を費す。簡素質實たる國語と雄渾奇勁なる漢文とを調和し、屈曲自在なる雅言と放膽楚麗なる俚辭とを融合し、茲に些かの罅裂をも見出し能はざる藝術品を形成せり。即興詩人の行動こそまことに眞そのもの美そのものにして、局面の轉化は讀者の端腕を許さず。其言は岩間の清水の如く冷瑣人の肺腑を衝く。實に我文壇不滅の典據といふも、尙辭の足らざるを憾む。

○ 作氏石漱目夏 ○

讀者諸賢の便を思ひ携帶至便而も賣價は大本の半額以上
合本縮刷して刊行す

■ 合本 鶉籠、虞美人草

送價一圓五十錢
送料八錢

■ 合本 三四郎、それから、門

送價一圓五十錢
送料八錢

■ 合本 彼岸過迄、四篇

送價一圓五十錢
送料八錢

□ 草 枕
□ 滿韓處々
□ 夢十夜

送價四十四錢
送料五錢
送價四十五錢
送料五錢

□ 思ひ出など
□ 坊ちやん
□ 切抜帖より

送價四十四錢
送料五錢
送價四十五錢
送料五錢
送價七十六錢
送料六錢

■ 集作全吉重三 ■

全創作七十餘編を収む。各頁殆ど完膚なき迄に改竄したる胸心慘憺たる新藝術の集成である。裝幀善美眞に出版界を驚愕せしめし列冊。

(6) 霧の雨 四短種篇	(5) 千鳥 八短種篇	(4) 女 五短種篇	(3) 小猫 五短種篇	(2) 赤い鳥 四短種篇	(1) 瓦 六短種篇
(13) 小鳥の巢 下卷	(12) 小鳥の巢 上卷	(11) 八の馬鹿 十短種篇	(10) 櫛 五短種篇	(9) 桑の實 長篇	(8) 金魚 十短九種篇
					(7) 黒血 五短種篇

□ 津田青楓氏裝書
高野正哉氏裝書

各册十五錢 春陽堂 郵送料六錢

■ 長田幹彦氏作 ■

津田青楓氏裝釘

■ 情炎 ■

縮刷美本 價六十錢 送料六錢

子までなした相愛の仲をも破る義理の假面、愛なき亡霊の如き結婚、清純な處女心を濁す疑惑、良人の秘密に魂を裂かれ、毒を仰ぐ若き妻の慘劇、これ悉く人の世に狂ふ情火の一閃。わが幹彦氏材を某上流家庭の秘密事實にこり、豊醇瑰麗なる筆を揮つて凄艶きはみなき此物語を成す。眞に之れ至情至愛の事實小説。情火一閃若き男女を憎殺す

■ 舞 ■

■ 扇 ■

價九十錢 送料八錢

西京は女の都也。幹彦氏祇園土の舞妓を材とし本書を編む。行文豊麗舞妓の口紅よりも紅く眞に戀の國の哀歌。

■ 雪の夜語 ■

八十五錢 送料八錢

凍雪の國々を漂泊せる間の藝術的收獲の全部。幹彦氏の榮譽なるは地は本書により永遠なり。雪侍氏の世情善美。

■ つゆ草 ■

價九十錢 送料八錢

優しい俊子が愛人を抱いて海の雪原に惨死するを描く。濃霧に二つの銃聲は永遠に刻まれた不可の謎。

■ 島崎藤村氏作 ■

和田英作氏裝

藤村文集

縮本携帯至便

常に新酒の如く世に迎えらるるものは藤村氏の詩文也。本書は『藤村詩集』と同時代の散文集にして詩によつて表白し得ざる者若き日の自由奔放なる感情思想の結晶なり。されば本書を耽讀する者は『藤村詩集』を愛誦せざるべからざると同時に、詩集を愛吟する人々は又本書を繙かざるべからず。新版成るに際し讀者の便を思ひ、特に『藤村詩集』と同形を選ぶ、之れ眞に好個の姉妹篇。

菊半形三百一十頁箱入

價六十五錢・送料六錢

藤村詩集

價八十錢
送料八錢

『藤村氏は詩人であつて、唯の小説家ではない』と誰かど云つたが、氏の藝術の根柢は「詩」である。氏の詩を知らずして氏の藝術を談ずる事は、氏の小説を味ふことは出来ない。氏の詩集の賣行が日毎頻繁になり行く事實はよく此詩集の價値の不朽を立證してゐる。

露伴作との出

廬

價八十錢
送料八錢

鴨外作うた日記

價八十錢
送料八錢

紅葉作紅葉短冊帖

價金二圓
送料三錢

蕪園作覺めたる歌

價四十錢
送料六錢

178
890

終

